



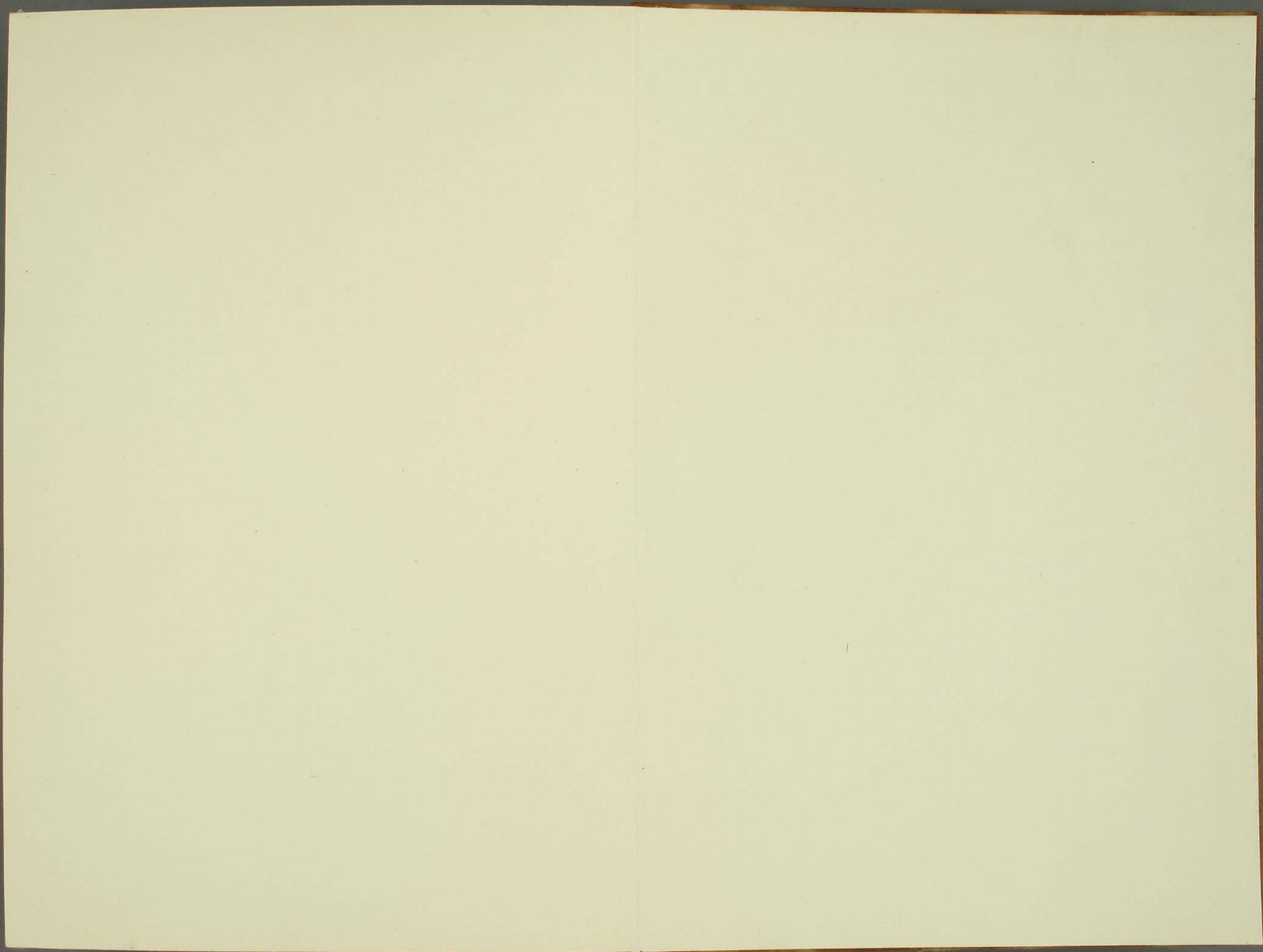
乾

いた心
上卷

正宗白鳥自筆草稿

特別
~14
8052
1





には、容易に信じしやあがつた。それういふ大
 めて、**最**格たの男の飛へ身を寄せたといふこ
 の女が、祖母の目めを晦ませ、自分であまを定
 云つて、**四**つちよくげら、笑つておたあ
 分より、**四**年下で、何時も子供らししことを
 した。その夜は興奮して眠らなかつた。自
 おみやは昔村のきぬ子の情事を聞いて吃驚

十八行通組



乾いた心
 一頁通し
 (一) 4

正宗白鳥
 二頁起し

20 通し

3 4 X トツカ

十八行通組

るやたこと ~~あんな~~ あんな無邪気な顔した女 ~~出~~
 の人 ~~心~~ 心は些々とも當て ~~あ~~ なるなかつた。
 吉村の家では全く見ず知らずの男 ~~あ~~ なんです
 っ。 ~~あ~~ 学救の往復 ~~あ~~ きぬちゃん ~~あ~~ 知合 ~~あ~~ います
 っ。 ~~あ~~ たんでせう。 西洋画の ~~あ~~ 繪師 ~~あ~~ なんです
 っ。 ~~あ~~ と、最初 ~~あ~~ この話を傳へたおまき ~~あ~~ が云つ
 ておたが、 ~~あ~~ 学救へ通学 ~~あ~~ の時間 ~~あ~~ を往復 ~~あ~~ しての正
 確 ~~あ~~ は計 ~~あ~~ っ。 ~~あ~~ 一分 ~~あ~~ の遅速 ~~あ~~ をも許 ~~あ~~ さないほど
 嚴重 ~~あ~~ の ~~あ~~ 戒 ~~あ~~ して ~~あ~~ いる吉村 ~~あ~~ の祖母 ~~あ~~ が、孫娘 ~~あ~~ を

るんな隙間 ~~あ~~ を狭 ~~あ~~ へて ~~あ~~ 長 ~~あ~~ 々 ~~あ~~ 間 ~~あ~~ 気 ~~あ~~ 付 ~~あ~~ かないで
 濟 ~~あ~~ んだのは不思議 ~~あ~~ であ ~~あ~~ った。 ~~あ~~ 叔 ~~あ~~ 母 ~~あ~~ の
 家 ~~あ~~ を寄 ~~あ~~ 食 ~~あ~~ して ~~あ~~ 気 ~~あ~~ 儘 ~~あ~~ に通 ~~あ~~ 学 ~~あ~~ して ~~あ~~ いる ~~あ~~ お ~~あ~~ 自身 ~~あ~~
 みは、電車 ~~あ~~ の中 ~~あ~~ や往 ~~あ~~ 来 ~~あ~~ で ~~あ~~ 知 ~~あ~~ う ~~あ~~ ぬ ~~あ~~ 男 ~~あ~~ と ~~あ~~ 近 ~~あ~~ 寄 ~~あ~~ する
 なるや ~~あ~~ ち ~~あ~~ 場合 ~~あ~~ は ~~あ~~ 一度 ~~あ~~ 中 ~~あ~~ へ ~~あ~~ った。 ~~あ~~ 暑 ~~あ~~ 中 ~~あ~~
 休暇 ~~あ~~ を ~~あ~~ 歸 ~~あ~~ 省 ~~あ~~ した ~~あ~~ 時 ~~あ~~ は ~~あ~~ 長 ~~あ~~ 路 ~~あ~~ を ~~あ~~ 一 ~~あ~~ 人 ~~あ~~ で ~~あ~~ 旅 ~~あ~~ した
 た ~~あ~~ った ~~あ~~ が、 ~~あ~~ 同 ~~あ~~ 車 ~~あ~~ の ~~あ~~ 客 ~~あ~~ の ~~あ~~ 誰 ~~あ~~ か ~~あ~~ ら ~~あ~~ ち ~~あ~~ 構 ~~あ~~ は ~~あ~~ ず ~~あ~~ かな
 った。
 小説 ~~あ~~ で ~~あ~~ 讀 ~~あ~~ ん ~~あ~~ だ ~~あ~~ り ~~あ~~ 空 ~~あ~~ 想 ~~あ~~ を ~~あ~~ 描 ~~あ~~ いた ~~あ~~ り ~~あ~~ ぬ ~~あ~~ いて ~~あ~~ いた
 と ~~あ~~ ぬ ~~あ~~ 子 ~~あ~~ の ~~あ~~ 身 ~~あ~~ 實 ~~あ~~ 際 ~~あ~~ を ~~あ~~ 經 ~~あ~~ 験 ~~あ~~ して ~~あ~~ いる ~~あ~~ 身 ~~あ~~ が

と思つておると、かねてほんやり心の奥おと
 なつておたおみや自身の将来がいし／＼と案
 せし中出たした。家名だけは近郷で一二を争つ
 こおても、身代は云ふ足らない。山村の旧
 家子生かた彼女は、生中の田舎の女学校を通つ
 たため、泥臭い田舎●
 家の主婦子
 存つて一生を送る気になつて、持込
 まつた。諸方の縁談を管なく断拒せ散らした
 揚句、根気よく父や兄を説いて、やう／＼
 子東京の高等な学校へ修業を出て来たので

十行廿五 伊東屋

あつた。女学校卒業後直ぐ上京した同窓
 て仲のよかつた友達かゝり、のり／＼の消息は、
 周囲の反對のため、挫折しかけた彼女の決心
 子油を注いで、は絶えず燃え上らせたのであつ
 た。お前の嫁入りの仕度金は子やんと別つしてあ
 るから、強いて學問がしたいのなすも牛だけ
 は修業金を出してやつてもいゝ。しかし、
 のかほり、卒業後は一文も送らぬから、自分
 の生活は自分の働くまでやらず、子やなさんで。

十行廿五 伊東屋

結婚するよし、この自分、のちで仕度をして、
 決して親兄弟も當てよし、やなさん。
 かの覚悟をしとるか、と、父親は出陣前、
 厳かき言、~~聞~~聞せた。
 東京で病氣したつて、遂方だか、構つたや
 柳さん。男の子で、~~減~~減へこの~~村~~村
 もや東京の學校へ行つた、のはないのよ、
 たつて行くか、と、~~長~~長兄の云つた。
 極めつけ、と、長兄の云つた。
 おみやよは死を以つて、この中、當つた。
 試験

落葉したら、死ねば、いと、卒業後、自治が出来な
 かつたら、死ねば、いと、~~上~~上京前後、~~保~~保証
 單子事も極めておたのたつた。そして、
 人、なつて、受けた、遠縁の叔母の家、か、通學、
 し、出して、か、は、~~傍~~傍目の、~~觸~~觸ら、~~子~~子、~~學~~學課、~~疑~~疑
 つて、おたが、一二年、経つ、問、~~子~~子は、~~將~~將來の、~~光~~光明、
 り、不安な影、が、目の、先、子、子、~~同~~同窓、~~の~~の、~~人~~人、~~達~~達、~~よ~~より、~~の~~の
 舎で、愚問、~~々~~々、~~し~~して、おた、~~同~~同窓、~~の~~の、~~人~~人、~~達~~達、~~よ~~より、
 二三年、卒業期、の、~~遅~~遅、~~や~~やる、~~こ~~こと、~~や~~や、~~女~~女、~~教~~教師、~~と~~と、
 二、三年、卒業期、の、~~遅~~遅、~~や~~やる、~~こ~~こと、~~や~~や、~~女~~女、~~教~~教師、~~と~~と、
 教壇に立つて、~~独~~独身、~~で~~で、~~一~~一生、~~を~~を、~~渡~~渡、~~る~~る、~~こ~~こと、~~や~~や、~~女~~女、~~教~~教師、~~と~~と、
 二十行廿字

13 乾

君の縁ついでに吉村一家とも自然見知り合ひ
 振つた新聞のやうな軽く聞流してはおろし
 なかつた。花柳のやうな軽く聞流してはおろし
 けい、用心なさいよ。女は若い間は一度間
 違ひをしたと一生取返しがつかぬ
 と云つて、吉村の祖母の毒な境涯を細
 話して聞かされたが、平生々々一
 聞かすやながさして興味も感じな
 いで碌

おまをば

花柳

この家族とは

子住んでゐる

十行廿七

12 乾

少くも細く思はれておた。碓子田舎におた時分
 可成り度の強い近眼鏡を掛けなければ
 毒物が濃めなかつた彼女の目の、この頭には
 つて著るしく悪くなつた。ことが、彼女の頭の
 中をますく暗くした。彼女の頭の
 従兄の家の食費を拂つて部屋を借
 りておるばかりで、死んで打明けた強
 たいのだが、従兄の家へは時々遊
 びに行つて、人のよそごそな真處の妻君
 は誰よりも懇意にしておた。直に近
 流

従兄

母の家

暗くした

彼女の頭の

子住んでゐる

十行廿七

は、骨身を憐れまはいのを白慢にしてる癖よ、妻
 めたの、お土地を自分の繁盛ささせるため
 はんか、おとちい構はない人だったの。お國のた
 へ、演説が何かしる出歩いたり、飲して、家の事
 家で、お終子分を集めて酒を呑んだり、方々
 ねたのでせう。西十五六で、偶は學者で政治
 つたのですつてね。眉を剃つて、鐵篦をつけて
 体不思議なやうだが、昔は、お中が當り前た
 て十六で、おはめう子供を生んだのですつて。
 六十三もなるのよ。十五の歳でお嫁子行つ
 11

「お、去年が本卦回りがたつたから、今年はお
 母の噂をするたいは極り文句のやうな先づか
 たやうなもりのたと思はれてよ」と、おまきは祖
 「あの祖母せんは昔勞しよこの卦へ生かて來
 子問、お氣したりした。吞込めぬ荒れがあるとお
 意、お出しして、吞込めぬ荒れがあるとお
 吉村一家の内幕、お子俄かお注
 度、の事件が絡んで來たため、お
 子、お耳お留めなかつたおみよめ、おぬ子の今
 10

子のこころは冷淡だつたり。冷淡かやないか
 中は出た地のためや他人のためを盡くしや
 つてるから、あやが明時の日死なるとも、あ
 前達か路頭を迷ふやうなことはないと、自分
 ではさう云つておたのですつて。でも、
 ちんか當てなるものかやないか。祖母
 せんは帯を解いて寝たことがないといふ
 くらおまして此しい思ひも心配な思ひゆせん
 一人娘が年ころになつた
 小から樂が出来よるといふ時分はな

て、西偶も死なれたのですつて。久江々々
 祖母も何れか一人娘のよ。祖母父せん
 つてるのが、頃の頃は女学校へ入る女はあま
 が野暮たかといふ頃、少い間から學問を仕込
 りなかつたのよ、娘は少い間から學問を仕込
 んで、西洋人の学校へまで入つて修業せられた
 の。おみやそん見たいな女子教師の資格を身
 つげぬせられたのですよ。財産を残す代りも女
 人立ちで文筆の墓しへ行けるやうなと云ひ
 つておたのでせう。
 女を教師にして

洗^{あらい}滌^{はらい}りや洗^{あらい}濯^{はらい}で
 夏^{なつ}物の^{もの}汗^{あせ}片^{かた}付^けて身^{かみ}體^{たい}の^の節^{ふし}々^々が折^をゆるやうなつ
 て弱^{よわ}つておたから、^{おたから}私^{わが}はせめて二三^{さん}日^ひでも産^う
 婆^{ばあ}さんで中^{ちゆう}産^{さん}つて、^{おばあ}祖母^{そぼ}さんは何^{なん}ももしない
 で^で休^{やす}んでおろつしやいと云^いふと、^{いや}否^{いな}の
 この位^{くらい}で凹^{こぼ}れやうかや、^{なが}長^{なが}年の^{ねん}苦^く勞^{らう}がもう一^{ひと}
 息^{いき}としふ^ふ洗^{あらい}でふいるなる。^{あさ}朝^{あさ}鮮^{せん}へ^へ腰^{こし}がた
 いだの肩^{かた}が凝^こるだのと書^かいたこ
 となら、^ここ中^{ちゆう}だから子^こ供^ごを^を出^だす
 さいと云^いつて来^くるは^は極^{ごく}つてあるから、^{わが}私^{わが}の
 は一言^{ひとこと}も自^い分^{ぶん}の^の身^{かみ}體^{たい}の^の苦^く勞^{らう}なんか^か彼^あ方^{なた}へ

救^{きう}へやつてするんでは^は先^ま日^ひも^も行^いつて見^みると、
 鮮^{せん}かとの僅^{わずか}かな仕^し送^{おく}りたけを當^あてよ、^げ下^げ女^{にょ}も
 へ使^{つか}はなれ、^{さん}三人^{にん}の^の孫^{まご}を^を中^{ちゆう}産^{さん}つて見^みると、
 んはどろしこも得^{とく}心^{しん}しないり。^あ沸^あ賢^{けん}な^な朝^{あさ}
 なのだけどぬ。^い遺^い言^{げん}を^を生^い命^{めい}おしておる^る祖^お母^ぼそ
 かり、^し章^{しやう}吾^ごさん^{さん}の^の言^い分^{ぶん}は^は誰^たが^が聞^きいて^ておる^る祖^お母^ぼそ
 ば^は隠^{かく}居^い料^{りょう}を^を送^{おく}つて^て安^{あん}穩^{ゑん}お^お暮^くせ^せる^ると^と云^いふ^ふん^んだ
 分の^{ぶん}實^{じつ}子^しを^を自^い分^{ぶん}の^の膝^{ひざ}下^{かた}へ^へ叫^なんで^て祖^お母^ぼさん
 が、^こ子^こ供^ごを^を朝^{あさ}鮮^{せん}へ^へ寄^よ越^こせ^せて^てい^いく^くお^お云^いつ^つて^て来^くて
 ぬ、^ここ中^{ちゆう}ばかりは^は心^{こころ}を^を聞^きか^かない^いの^のよ^よ自^い

として、久江が息を引取った所として、
 追憶の籠った家だから、自分の目の
 黒い間は、どうしても手放さな。萬一孫を朝
 鮮へ取らゆるやうなことがあったら、
 行つて隠居するよりは、~~今~~今の家で立派に
 自害して死なますと、祖母が
 自心からさう思つておるらしい
 牌の偶や嫁の位
 く云つておたことや、大隈センが八十で總理
 大臣になつておること、を思ふて、自分だつて
 また五年や十年は大丈夫だと、元氣をつけてお

知らぬ世にたこは、
 ぼろ／＼涙を流して、
 祖母さんばかり
 して、
 親類縁者との交渉を強しては、本筋の言足ら
 ないところを補つた。
 田舎から移轉した時、~~田舎~~田舎の苦しい工面をし
 て買取つて、東京へ
 今では唯一の財産
 であつておる飯倉の家屋敷は、
 匹偶の遺物
 おまきは、吉村の祖母の一代を推しつまんて
 話した後で、思出し、
 日頃の祖母の言行や
 祖母せんばかり

ところへ落ちて、はつきりした結着はつか
 いの。だから祖母せんは好むまで苦勞して
 だか、つこ、親類の中みはもう七も投げて見
 し、する気でゐる人ぬあるんですよ。……そ
 へ持つて来て、まぬやんが勝つ祖母せん
 の側かお進出したりし、おたんですもの。……
 見たことか、朝鮮の才で祖母さんの所為し
 て、だから他の子供も預けて置けな、強
 く出て来たら、祖母さんの才で一言も言
 言が立たんかやありませんか

十行廿五 伊豆屋

ることを話したりした。おみやは甘いや
 「気の毒な祖母せん……おみやは不仕合せ
 な聲音でかお歎息して、そんな不仕合せ
 老母は、何故打つて慰めて上げた、水ぬ。身
 の人は何故打つてくんでせう。親類中で、
 相凌み果つて上げてるんですけぬ。……
 何悶着のあつた揚句は、自分も朝鮮へは行
 かな、孫を三人とも、父親の所へは、や
 と頑張るんたから、4通遇つたつて話は一
 つ

十行廿四 伊豆屋

徒らに他人の悪を羨んだり、
 幻影を浮かべたりしてゐる。おまの
 心はあまり老成しておた。おまの
 の訓戒を思い出すにつけては、
 責任は感ぜられたが、長い一生
 で過すといふことは、今から
 かつた。悪とか理想とかいふ
 おまは、早くも色が褪せて、
 た。僅か一二年の都市生活の
 管願つておた。四つもおまの
 保陪を彼女には、
 生活の確りし
 文字は彼女の心
 一人立ち
 出脚間際
 父兄

23

分無者へたわぬ
 おまよはかろ非難して、おま
 男の誘惑をゆるぎなく、
 り合つた。自分の宿へ歸つて
 の電氣の下で、復習を兼ねた
 を休めながら、誘はゆるぎなく
 おまの心の根を浅くする
 り、誘惑をゆるぎなく、
 思いを遊ばせたりしておた。

22

自分の年齢が顧みられた。故郷の女学校を出
 こから上京するまでの間、無駄な月日
 がとろろ惜まや。自分の家、
 出した。二十三、二十四、二十五と、お
 は三十までの敷を指を折つて敷へた。

(三) 24

頭の痲痺の梅雨時となつた。お母は時
 期試験の近頃、たびたび昂奮して準備の凝るのを
 例としたので、今度の一月の前からいらく
 (こね)

落着かせておる

ける心を努めて押鎖めて、学校から帰ると直
 ぐまにむ向つて、夜も遅くまで起きおた。
 國漢文の成績がよく、お母の注意を
 (注) 専ら教師から受けたことかあつたので、
 の学課の復習は持身も入つた。そして、
 今年も休暇の暇も帰省しないことと極めおた
 のだつたが、食費を拂つて宿まつておる。過
 ちなぬお母の家で長い休暇を送る気はしな
 かつた。旅へ出ることには、お母の出来なかつた
 が、東京を見物して、お母の出来なかつた

十行廿五

24

ましておたほひたから、
 思ひつかはかつた。
 自分も出来そうに仕事があつたら、夏の
 二月の間働いていくらでもお金を儲けて
 見たいと、去年までは夢も思はなかつた
 と思ひを馳せた。
 「姉さん子頼みしたら何かいゝ仕事を探
 して下さるならいいですか。自分の力で出来
 へずせば、私に話さないことでもやつて
 見る気になつてくれるのですがね」と、
 試験前子一

愉快な銷夏の方法は

度忙しい時間を割いて、
 ねて、夢のやうな考へを眞面目に口に出して、
 おまを相談した。
 「貴女は今からなら、
 しなくつてゆいゝぢやないの。と、おまをば
 し、
 「私の力試しをして見たいんですよ。お金な
 んかおこしでゆいゝぢやないの。と、おまをば
 せろお思はなまいとしてかろつて、
 問かけ子供を教へ本を
 休暇の

十行廿字 伊東屋製

の 来^きが 不^ふ安^{あん}心^{しん}だ と 知^しり 思^{おも}ふ こと が ある の こと
 の 次^{つぎ}は 婦^ふ人^{にん} 雑^{ざつ} 流^{りゅう} はん が 思^{おも}ふ こと が ある の こと
 で 由^{よし} 何^{なに}で も 一^{いつ} 藝^{げい} を 身^み に つ け て 置^おか け け せ ば 得^え
 厭^{いと} び なら ない こと が 有^ある ん だ よ。 學^{がく} 問^{もん}
 「臺^{たい} 流^{りゅう} 仕^し 事^じ」 針^{はり} 仕^し 事^じ で 日^ひ を 暮^く ら し て 居^い る の が
 こ 筋^{すぢ} と せ る の が 癖^{くせ} だ っ た。 空^{くう} 呆^{ぼう} け っ て 他^{ほか} の こと を 云^い っ
 み 窮^{きゆう} し た 時^{とき} は、 空^{くう} 呆^{ぼう} け っ て 他^{ほか} の こと を 云^い っ
 な い お 世^せ 辞^じ の 云^い へ ない お 世^せ 辞^じ は、 相^あ 返^{へん} 答^た
 の 収^{しゆ} と、 や が て 呆^{とぼ} け た 顔^{かほ} し て 云^い っ た。 心^{こころ} は 分^{わか} ら ない も
 「こころ」 した ら 幸^{しゆ} 福^{ふく} な の だ か 人^{ひと} 間^{かん} は 分^{わか} ら ない も
 31

出^で 来^き れ ば、 ち ち を 取^と り 柄^へ は、 この 夏^{なつ} 季^き 休^{やす} 暇^ま 中^{ちゆう} 中^{ちゆう}
 け だ も 此^{こゝ} 方^{かた} は 来^き て お ら せ る の 事^{こと}、 平^{ひら} 生^{せい} は 念^{ねん}
 頭^{かぶ} は 置^お い て お ね だ っ た。 手^て 業^{ぎやう} の 無^む 器^き 用^{よう}
 が 残^{のこ} 念^{ねん} は 思^{おも} は せ ぬ だ。 貴^あ 女^{にょ} は 立^た 派^ぱ な 學^{がく} 問^{もん} の 方^{かた} で 資^し 格^{かく} が 取^と
 ん だ す も の。 浮^う 世^ぜ の 物^{もの} を 繕^{つくろ} っ た り し て 一^{いつ} 日^{にち} ま だ
 人^{ひと} し っ て 居^い る。 和^わ 達^{たつ} の やう な 女^め 性^{せい} は 馬^ば 鹿^か な やう
 み 見^み え る で せ ぬ。 女^め 性^{せい} は 馬^ば 鹿^か な やう
 お ま せ は 謙^{けん} 遜^{そん} し た ら ち ち も り で せ ぬ 云^い っ た が、 お
 み よ は 取^と っ て 打^{うち} 消^{しょう} し て ち ち は ち ち だ。 女^め 性^{せい} は 馬^ば 鹿^か な やう
 30

見も讀 ~~み~~ 見も讀 ~~み~~ 見も讀 ~~み~~ 胸がどきんとするんですよ。
 みよすやんとお交際してゐるため自然に感化
 を受けたのか由知やないわねと、おまを
 言葉はおぼろりではなかつた。 云つた 親の命
 令は盲従して結婚した自分なごより、自
 のお針も立てて男同様の時問をしておるおみ
 よ ~~お~~ 鑄程確りした賢明な女 ~~お~~ だうぞ
 ないの ~~お~~ がと見做してゐた。 ~~お~~ 一歩した英傳
 を話の中 ~~お~~ 押またり、西洋の強い殆を聞
 かせたりすると、自分の無學が念ひあつ

た。で、夫がおみよを早く縁付けさせた ~~お~~ ぞ
~~お~~ 口吻を流すたに、あの女は中々 ~~お~~
 結婚なんかする由 ~~お~~ 一箇の反對 ~~お~~
~~お~~ か。えらい考へを持つてゐるんですよ
 のを例としてゐた。……結婚なんかとか、えら
 い考へとかいふ言葉はおまを自身の不平や
 反感がいくらか答まけておないではなかつた。そ
 して、夫が微見かしてゐる嫁入りのことをお
 みよは傳へる時 ~~お~~ ほんの商興として取扱
 済み ~~お~~ 過ぎなかつた。

見も讀 ~~み~~ 見も讀 ~~み~~ 見も讀 ~~み~~ 胸がどきんとするんですよ。
 みよすやんとお交際してゐるため自然に感化
 を受けたのか由知やないわねと、おまを
 言葉はおぼろりではなかつた。 云つた 親の命
 令は盲従して結婚した自分なごより、自
 のお針も立てて男同様の時問をしておるおみ
 よ ~~お~~ 鑄程確りした賢明な女 ~~お~~ だうぞ
 ないの ~~お~~ がと見做してゐた。 ~~お~~ 一歩した英傳
 を話の中 ~~お~~ 押またり、西洋の強い殆を聞
 かせたりすると、自分の無學が念ひあつ

乾

掛けで入つた。お遊あそひもしやいませんか。有い楽らく座ざの
 演えん藝ぎ會かいへまねる筈はずはなつて居ゐり
 すので、お厭いやでなけやばお誂とろしいたいて、主しゅ
 人が申まをして居ゐります
 おまきの端は書がきの文ぶん句くは、寂さびしい道みちでふと
 懐なつかしい人ひとも厚あつたやうよ、おみやの心こころも明ある
 くした。少すくし時とき祖母おばあさんは高たかい山やまとかお前まへ
 を得まて、三さん味み線せんのお菓か子こを餌えはして貰もらつたの
 中なかで、祖お母ぼさんは以い外がいの知ちほははして貰もらつたの
 だが、祖お母ぼさんは以い外がいの知ちほははして貰もらつたの

十行廿字 伊東屋製

乾

の趣しゆ味みがなかつたので、進すすんで習なはさ
 ながかつた。そして、芝居しばいであや浪なみ花はな節ふしであ
 中なか、田の舎なみおた時ときか今いままで、たごの一度いちど
 も遊あそび藝ぎのサタもりを見み聞きましたことばなかつ
 たのたかろ、名な前まへだけ知ちつておる有い楽らく座ざへ出で
 掛かけるといふことは、好すむ嫌きらむおまかとはらす
 多お少ちの好この奇き心しんも、
 明日あしたの晩ばんは芝しばの徒た兄にいさん達たちも有い楽らく座ざ
 へ行いきまよすよ、叔お母ぼは向むかつて懐なつかし
 り話はなして羊ひつ次じましがらなつた。

いし、自みづか
 分わは無な
 痛いたは
 大おくは
 大おくは
 大おくは
 大おくは

十行廿字 伊東屋製

乾

めみ座をついた。
 「早過ぎたお邪魔なつて」と、おぢよは
 突立つたまこで云つて、風呂敷を開けて
 英文典を出して、「そり思つて、私
 今も書物を持つて来たの。彼方で黙つて勉
 強しておますよと云つて、向ひの縁側の方へ
 行つて、柱の側へ蹲んで、辞書を前へ置
 筆は手おして、面の倒な文典を讀んで考
 へておた。日避の絲瓜が棚から屋根へかけ
 て、その影を透かして犬

乾

翌日おぢよは、長い間打遣うかしておた。汗
 水物の洗濯をして朝の間に過して、午
 箸を置くと、新しい浴衣を着替へて、可成
 り涼しい目立たた袴を平生のまこは穿けて、
 芝の従兄の家へ出掛けした。従兄は二階で食後
 の午睡をしておて、おぢよは例のやうに茶の
 間で縫仕事をして、おぢよは来ておた。
 「大変早く来たね。伊外は暑か
 つたのでせう」と、周囲は散らかしておた。一
 つ二つ手繰り、おぢよは「おまもは寄せて、客の布片
 勤勞」を求めましたね。伊外は暑か

ではないかと、この頃日よ／＼暑縮してゐ
 る空漠たる夢だが、おみやの胸よも残んぬ先を
 放つての甲斐があった。
 夕餐は東洋軒で食へることよしして、三人は
 早目家も出た。従兄は平生の散步同様の
 気持であつても、女達はる／＼心の躊躇
 を感じてゐた。
 暑中の演藝會で有指した顔振つたの
 で、有楽座の客席は淋かつた。ごめ、華美
 な服装をした聴衆 **極**めが我は顔して周

田の席をひめてゐるの、おみやは極りの悪
 い思ひをした。身振り振り **も**あまり気まかせ
 ない ~~身~~ 彼女も、生々初めて都會の歡樂場
 身をおいたりで、自分 ~~の~~ 田舎臭い風流
 を鏡に映して見ると、やうな気がした。絶えずか
 りいふ荒へ出入りしてゐる都季の人達の豪奢
 は生々 ~~の~~ 驚かした。
 が、舞臺で演ぜらうたいろ／＼の音曲や落
 沿や講談など **は**取して ~~は~~ 感刺戟しよ
 かつた。酔つてゐるや **彼**女の ~~の~~ 了又 ~~の~~ 聴惚

おまを初め

彼女

十行廿五

明るい涙を流した空気が漂つておるやうで、
 中々、其家へ行くたに、お母の家の奥は異つた
 一つ、一國を従兄の松嬢は取り難そうだけ
 頼りない心を慰め、不平らしい口吻を流し
 強の間々におままと打融け話をし、
 の身傳ひをしたりして、おままと
 想ひ浮んだ。おままと、従兄の家におままと置い
 て貰つて、袴がけて拭掃除をしたり、おままと
 り、おままと受けて行くやうな場所として空
 想ひ浮んだ。おままと、従兄の家におままと置い
 たり、おままと受けて行くやうな場所として空
 想ひ浮んだ。おままと、従兄の家におままと置い

おままと

来たい前、暇を告げた。
 休暇中、東京におらつしやるんねら、時々お
 遊びに入つしやいな。その中も、つとら、所へ
 お誘ひしますよ。帝劇か歌舞伎、
 上げた、おままと、おままと、
 たが、おままとは、おままと、
 た。他人は、歡樂の世界か、おままと、
 昨日、経験したやうな、歌舞音曲で、微塵も現脱か
 すこと、の出来な、おままと、
 舞伎とか、おままと、
 田舎臭い、おままと、
 自分、おままと、
 貧乏な、おままと、
 振、おままと、

あつて、自分の部屋へ帰ると一層陰気が周
 りが、見えるのだった。試験後で勉強の張合
 が、気の弛んでゐる。今日は殊もさうであつ
 た。
 思ひなしか、目が俄か下また悪くなつたや
 りで、頭眩は蜘蛛の巣が張つておるやうな
 不快さを感じた。机の上は重宝の両
 知の上は額を當てて、と、おたがす
 ると、変な夢ばかりが、彼女を襲つた。
 「おみやよせん」と呼ばれる幽かな聲が

十行廿七 伊東屋

目目を醒ますと、
 どのしなせんしたと、お母は赤ん坊子乳
 を會ませながら入つて来た。
 「知どうかしましこも？」
 仰山厭鬼をやらせたりありませんか。晝日
 中夢を見るのは、えらう気が掛かることでは
 あるんかやうらやま
 叔母は寝顔を見せられるのが厭せよ、横
 へ向いて怖い夢の跡を追つておたが、叔母は
 懇親切な縛い口調で、その気が掛かることを

田舎訛の掛けは

さうさう

十行廿七 伊東屋

訊詰つた。

別段気ま掛けることありませんの。た

机で胸を壓しておましたから……

「さ中ならいこけや、屈託があるんはさ

やつと知子明して涕賢いな。以前とは貴女の

様子がお違おつたよ。やうな知は晩んで居ります

「は

「……この鈍な女は何が介るものかと

あみおは沈黙の中を反抗しておたが、先を見

た目の貫つた夢は、自分の将来を暗示した

やうで無気味だつた。赫々と照つておるあの

勢いのいこ日光とへ、今も庭を見えなく

るかの知中なれと思ふと、●●夏の日光

みゆ不思議な懐しさを覚えた。

「故郷からは學費屋を入るだけ送つて呉れと

うするし、貴女は男ゆかにはんぼど一ひ子

勉強しとゆりなせるん申だから、申分はない

んかやけやいな。……おみやよんくお若い

女子が親衛先許を離れ一人て居ると、得

ていらんお苦勞が湧いて出るものですな。

